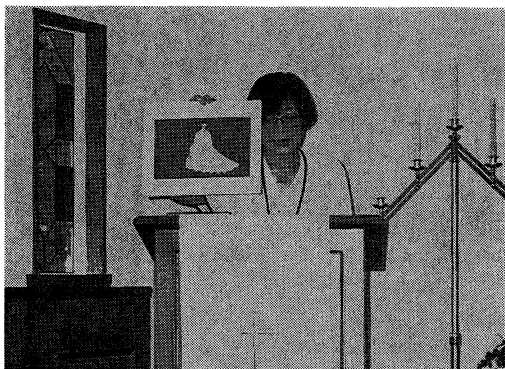


(一) 溝口百合同窓会長の追懷

ここに掲げるのは、前述したごとく、昨夏七月一日、二日の両日にわたり仙台で執り行なわれた「デフォレスト先生ご召天十五周年記念祭」において、開会礼拝にひき続き、神戸女学院同窓会の溝口百合会長によってなされた、デフォレスト先生に関する追懷の全容である。



デフォレスト先生追懷
先生のお人形の写真と溝口会長

溝口会長は、神戸女学院高等女学部第五七回、高等部英語師範科第六〇回第一次（戦時の特別措置により九月に卒業式が行なわれた）の卒業生で、卒業と同時に母校に奉職。一九四六年に今は亡き溝口靖夫教授（本稿註②参照）と結婚ののちは、教職と牧師職とに盡瘁していらした御夫君を援けておいでであったが、一九八五年には、故溝口先生が開拓伝道によってその創設に献身なさった教会、日本基督教団・西宮基督教センター教会の二十五年史の編纂を手がけ、見事にその責をお果たしになった。

神戸女学院同窓会長としての御奉仕は一九八七年四月からのことであるが、それに先立つこと四年の一九八三年より同窓会理事をつとめ、その任期（二期）が今年度（年度末・一九八九年三月）で満了する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

溝口でございます。

こんな写真を持ってまいりました、——このお人形を御存知でいらっしゃいますでしょうか。これは、デフォレスト先生がお書きになった『わが心の自叙伝』の中に、

「母の教えは教科書に限っていませんでした。お裁縫、編み物などを学ばすために米国から大きな人形をとりよせ、着るものを赤ちゃんの時からお嫁に行くまで全部作ることを教えてくれました。」

という一節がありますが、^①そのお人形がこれだと言われております。そんなに大きいというほどでもありませんので、これかどうか、わたくしにはわからないのですけれども、これだと言われております。今、この実物が同窓会館の応接間に大切に飾ってございます。この写真の赤いバックは、勿論写真を撮るためだけでして、普段は、同窓会で作ったガラスのケースの中で、大分色褪せてはいるのですがきれいな模様のおふとんをちゃんとかけまして、眠り姫のように長い間ずーっとネンネしております。ネンネしていると言いますが、お目々はこう、パッチリといつでも開いております。重要文化財のようなお人形ですから、お人形自身を持って来る——連れて来るわけにもまいりませんでしたが、皆様に見ていただきたいと思いましたが、それからこのお人形にとりましても若い時——今でも若いままですが——若い時を過ごした「なつかしの仙台」ですものね。それで写真を持ってまいりました。

岡本院長の御指示と仙台支部からの御連絡で、今日のこの夕べ、何かデフォレスト先生の思い出をお話するよう——とのことでございました。けれども、先生がどんなに信仰深い方だったか、どんなに優れた教育家でいらしたか、どんなに神戸女学院をお愛しになったか、どんなに生徒さんお一人ひとりを愛して下さったか……というようなことは、あとでもまたお話がございましょうし、仙台と先生のつながりにつきましては、わたくしには勿論お話す資格もあ

りません。実際、ここにいらっしゃる先輩方のほうが、直接親しく先生にお接しになって、なつかしい思い出をいっぱい持っていらっしやると思います。溝口の姉の西原 恵は三八回の卒業で、八四歳ですが、この間ちょっとデフォレスト先生のことをきいてみましたら、「デフォレスト先生の思い出なら山ほどあるよ。毛筆で上手に漢字もお書きになったしねえ」なんて言っておりました。それから逆に、先生が戦後再び日本にお帰りになった時に教室で先生から授業を受けた、わたくしよりも若い方もありますし。その方たちには、あるいはこのお人形を教材にお使いになったのじゃないかなーとも思うんですけれども、長いこと中高部に置いてありましたから。

わたくしはちょうど、その先輩と、わたくしよりちょっと若い方との間の、一九三五年昭和十年の入学でございまして、デフォレスト先生といえば、講堂のはるか壇上にいらして、何と上手に上品で優雅な日本語をお使いになるのかしら、と感心したり、それから、むしろ楽しい教育勅語を全然まちがわずにお読みになって、わたくしなんかイタズラでしたから、どこかでお間違えにならないかと耳をすましていたんですが、何遍うかがっても全然お間違えにならない、それでびっくり仰天しましたり④：先生の思い出としては、その勅語とか、奉安殿のこととかになります。そして戦後、先生が日本にお帰りになった時は、あいにくわたくしは、年子の赤ん坊を育てておりました、開拓伝道の溝口を助けて忙しく、直接のお交わりもなくて、ただ、多忙なためか割合筆不精でした溝口にかわって、晩年の先生と文通をいたしましたもので、先生との関わりは間接的と申しますか、しかしかえってその方が、何と言いますか、余韻があるといえますか…。

そういうわけで、昔の同窓会誌『めぐみ』のデフォレスト先生特輯号などに載っております先輩方の、先生のなつかしい思い出というのとはちょっと違ひまして、『神戸女学院百年史』には載っていますが、そして最近、山口学長が『近代日本のキリスト教の光と影』という本をお出しになったばかりですが、わたくしがおりました頃の神戸女学

院の特殊の時代のことをあえて申し上げることになるかと思っています。また、亡くなりました溝口靖夫を通しての係わりという個人的なことになるかもしれませんが、お許しいただきたいと存じます。

女学院の『百年史』によりますと、一九三七年昭和十二年十月十一日の文部時報に、先生は日支事変に関する所懐を掲載して、敵対国の中国国民に対して友愛の情を持ち続ける日本であると信ずる——というような意味のことをむずかしい日本語で書いていらっしやいます。^④それが十月十一日です。そして十二月十二日の南京陥落の祝賀の旗行列には、院長として参加していらっしやいます。学院のほかの米人の先生は参加を拒否なさった中でしたけれども。そしてその後、南京の日本軍のことについて先生は情報を得ていらっしやいます。その時先生はどんなお氣持でいらしたのかしら——と、当時の生徒だったわたくしは今頃になって思うわけでございます。

その前年から御真影を奉戴するように内示があつて、いよいよ昭和十二年に奉安殿を造営しております。それ以来、男子の教職員は毎晩当直して御真影を守っていた——ということは、溝口からも聞いてよく知っておりましたけれど、先ほどのデフォレスト先生の『わが心の自叙伝』を今また読んでみましたら、最初の夜は女のデフォレスト先生が自ら泊って番をなさった——とあります。^⑤

一九三八年昭和十三年の三月には、憲兵隊からの一三か条の質問事件というのがおきております。これは女学院に直接来た質問ではなくて、組合教会会長でいらした畠中 博牧師^⑥に宛てたものではありませんけれども、畠中先生はデフォレスト先生の下で女学院の副院長でしたから、従つてその先生の回答が女学院の意志表示にもなるということで、そのことを部長会にも諮った——と百年史にもございます。^⑦それでその回答が出来まして、憲兵隊に提出する前に、デフォレスト先生は、この答えでいいだろうかと非常に心配していらっしやいます。畠中先生は、これで大丈夫だと

言ってらっしゃるんですけれども。この回答の草案には、畠中先生と一緒に、当時まだ部長会のメンバーでは勿論なかった青二才の溝口が実は係わっておりまして、それは、後の世の、その時代に居なかった第三者から見れば、いろいろと御批判・御感想があると思いますが、当時の学院当局の苦勞はこの上もなく、殊にデフォレスト先生の御心労は、今考えると、痛い思いがいたします。

この思いは、ソールチャペルの十字架につながります。今置いてあります、ソールチャペルの十字架。あれは、昭和十四年一九三九年の八月にデフォレスト先生が北支訪問をなすった時に、おみやげにお持ち帰りになったもので、うで、溝口が書いております『百年史 各論』^⑩の文によりますと、――ソールチャペルの正面は、初めヴォーリズさんが設計した当時は、プルピットがありまして、その後ろにただ三つ椅子があるだけの非常に簡単なもので、その写真も同じ『百年史』に載っておりますが、「ピューリタニズムの礼拝様式に関する単純さの一端が現われている」と書いております。そして、お持ち帰りになった十字架が今のようにそこに置かれましたのは、その時の神戸女学院の荷うべき十字架を表わす――という風な意味のことを書いております。そしてそれはその時のデフォレスト先生の十字架そのものであったのでしょうかと思います。

けれども、こういう時代にも、デフォレスト先生にとってほのぼのとしたあたたかい事件もあったのでして、それより三か月前の、五月の自治会デーのことです。その時、一九三九年昭和十四年、わたくし共のバザーはなくなってしまったんです。その前年の一九三八年昭和十三年には「愛校バザー」という名称を変えまして「恤兵バザー」^{じゅうへい}という名前で開催し、それがわたくしたちのバザーの最後でございました。そしてその翌年、バザーの代わりに「自治会デー」というのを五月にやったのですが、その時を、デフォレスト先生に内緒で、わたくしたちはお祝いの会にしたいんです。何のお祝かと言いますと、デフォレスト先生の還暦のお祝。で、先生に内緒で、講堂に集まった時、先生を

びっくりさせるようなプレゼントをする——ということになりました、まっかな絹のクッションに白で大きく「壽」という刺繍を、千人針のように一針一針生徒が縫いまして、そうしてそれを先生にさし上げたんです。先生はとてもびっくりして、とてもお喜びになって、それをこうお持ちになった嬉しそうな写真が、これも『百年史』に載ってるんですが(実はそのクッションは今同窓会館にこのお人形ですが、大事に保管してございます。年に二遍防虫剤を入れて)、、そういうお祝いをしたんですね。

ついでにその自治会デーのことでどうしても皆様に申し上げておきたいのは、そういう時代だったんですけれども、その還暦のお祝のあとで、生徒と先生とが一緒になって、学院の歴史とか、愛校精神、愛神愛隣の精神とかをあらわすような余興や演劇などをやっただけですね。そういう時代であったにも拘らず、そういう時代であったからこそ、そのようなことを皆で一所懸命やったという、教育というか雰囲気というかが、女学院にはあったということ。そしてその中心にデフォレスト先生がいらしたということ。そのことを、どうしても今日、皆様に申し上げたいと思ったのです。

で、それが五月で、それから十月には、同窓会でも還暦のお祝をして絹のコートをプレゼントした——とありますが、これは、わたくしはその時まだちゃい生徒でして、同窓会員ではありませんでしたから、記録で知るだけですけれども、お祝いしたようです。そのさし上げたコートを先生に着ていただいて、それを写真に撮って、会誌『めぐみ』に載せようという計画があったらしいのですけれども、さっきから申し上げたような時代の非常な御心労で、とうとう先生はお体を悪くなさいました、同窓会の還暦のお祝は十月だったんですけれど、十一月に、先生は院長室で執務中にお倒れになって、それで、そういう写真を撮ることもできず、そして欠勤なすって、アメリカに帰って静養なすって、ついに院長職を退任なすって、副院長の畠中先生が今度は院長先生とおなりになった——ということでございます。

います。

で、一九四一年昭和十六年に戦争が始まりまして、わたくし共の学年は初めての繰り上げ卒業という措置にあいまして、昭和十七年の九月二十九日にわたくしたちのクラスは学校を追い出されてしまいました。

私事ですけれども、九月二十九日の翌日の九月三十日一日だけ、わたくしはうちにおりまして、その翌日の十月一日から母校神戸女学院に奉職したわけでございます。

そこからちょっと、デフォレスト先生のいらっしやらない時の事に触れさせていただきますが、次第に戦争が激しくなりまして、空襲警報が出ましたら、奉安殿から御真影をお出しになったのを、畠中先生と、どういうわけかわたくしと、二人でそれをお持ちして音楽館のコーラス教室の床下^④へーということに決められておりました。で、風呂敷に包みました御真影を、畠中先生は御自分は手ブラで、わたくしにお持たせになり、そして音楽館のコーラス教室の床下で、わたくしはその風呂敷包みを胸の下に置いて、こう、覆いかぶさります。その当時ですから、あまり深いことは考えなかったんですけれども、御真影を守ってわたくしはその上で焼夷弾で死ぬのかなあ、畠中先生のお背中の方が大きいから守るのにいいのになあーなどと思っていました。そのうちに警戒警報が解除になりましたら、一同がずらっと奉安殿の傍に整列しているところに進みまして、奉安殿にお納めになるのは、勿論今度は畠中先生で、御自らお納めになるんですが…。

今になって、わたくし、しみじみと思いますのは、さっき述べたようなデフォレスト先生の種々のお氣遣いのストーリーがありまして、そして、先生がアメリカにお帰りになったあと、そのストーリーの続きとして、わたくし共の今言ったような時代があったのかーということ、わたくし共は、デフォレスト先生の、アメリカ人で日本のキリスト教の学校にいらっしやる、その悲痛な御苦勞を何にも知らなかったなあーと改めて思います。

岡田山からは先生のお姿は消えていたわけですが、先生はアメリカでその頃どんなお気持で過ごしていらっしたのでしょうか。マンザナーの日系人転住所で御奉仕のあと、先生が再び日本にお帰りになったのは、一九四七年昭和二十二年の六月十一日です。^⑭その翌日の六月十二日には天皇が学院を訪問していらっしますから、それに合わせての御帰国だったとわかります。それから四、五年、先生は再び女学院で教えるようにおなりになったのですが、その時、先生はほんとに感無量という表現そのものでいらしたと思うんですね。御帰院後先生が最初にお選びになった聖句^⑮を見ると、先生のお気持がわかります。

また、その頃開拓伝道を始めた溝口を非常に喜んで下すって、何かにつけて励まして下さったのは、あの戦時中の学院を、共に何とか抱えて過ごした者への感慨がおりになったのでは……と思います。で、ようやく小さな土地が与えられて小さな教会堂が建てられたのですが、学院がお棄てになった古瓦を畠中先生から戴きまして、それを教会の屋根に乗ったんですけれども、その時、デフォレスト先生は教会に、先生がお使いになってた古い石炭ストーヴ（ダルマ式というんですか）を下すったんです。その時は、また先生はアメリカに帰っておしまいになってた、昭和二十八年か九年かその辺でしたと思いますので、やはり直接先生からお手渡しいただいたわけではなくて、畠中先生を通じて戴いたのですけれども、で、そのストーヴは、礼拝中にも何遍かくべなければいなくて、ガチャガチャとやかましかったんですけれども、そのストーヴは長いこと教会堂を暖めてくれただけではなく、わたくし共の心までホカホカと暖め続けてくれたのでございます。

最後に、一通のデフォレスト先生からのお手紙を御紹介して、わたくしの話を終わらせていただきたいと思います。個人的な手紙はたいいてい、先生はうちの方に下すっておりますが、これはコーベカレッジ気付で、わざわざここに「パーソナル」と書いてらっしゃるんです。日附は一九七二年昭和四十七年四月十二日。先生はその翌年の七月二

日に御召天ですから、お亡くなりになる一年二、三か月前の、先生が九三歳の時のお手紙なんですね。もう御病気で、クレアモントのレストホームから、となっておりませう。メリー・ストウ先生は晩年、ちょっとこうお年寄らしい字になったと思うんですが、これはもう本当にきれいな、元のとおりのきれいな字で、そして、封をしてから、裏に、四月十二日と書いたけれども、それは十一日の間違だったと訂正してらっしゃるのも面白いと、先生らしいと思うんですが、で、これはちょっと面白い手紙です。終わりの方にミセス・溝口によりしくとはありますけれども、溝口個人に宛てた手紙でございます。

「：溝口さん、あなたは昨晚のハリウッドのオスカー賞の授賞式のテレビを見ましたか？多分日本にも人工衛星（放送衛星ですか）でテレビに映ったと思うのですが、どうですか？もっともあなたにはそんなラックスをする暇はなかったかもしれませんね。」

どうして私とそのオスカー賞の授賞式を見ようと思ったかという、それは、チャーリー・チャプリンを見ようと思ったからです。チャプリンが受賞しにどこか外国の家からやって来て、受賞するのを見たかったです。見ましたら、チャプリンは白髪のおじいさんでしたけれども。

溝口さん、あなたは昔、神戸女学院の教職員のパーティでチャプリンのものまねをしたのを憶えていますか？私がチャプリンというのを知ったのは、その時が初めてでした。そしてチャプリンって何と面白いのだろうと思いました。昨晚、私がどうして見たかったかというわけは、あなたが昔ものまねしたチャプリンと本当のチャプリンがどれだけ似ているか（つまりあなたがどれだけ上手にものまねしたか）、見たかったからです。」

チャプリンがオスカー賞をもらったのはおじいさんになってからですけれども、その時に、ここには書いてないですけれど、多分、「モダン・タイムス」か何か若い時の映画を上映したんじゃないかと思うんですけれどもね、デフォレスト先生は、比べたかったから見たーと…。

「それで私には、あなたが昔演技したのが本当に上手だったということが、昨晩^{ゆうべ}わかりました。

溝口さん、あなたは多分今は非常に忙しくて、そんな面白いものまねとか、そんなことをする暇はないのかもしれない。けれども、あなたはこういう諺を知っているでしょう？

“All work and no play makes Jack a dull boy.”

だから溝口さん、時には、楽しい笑い、リラックスを忘れてはいけませんよ。…」

ちょっと余談になりますが、溝口は昭和七年にアメリカから帰って来て、就職難の頃で、鈴木吉満さん^⑩という理事さんを通して学校に就職を申し出たんですけれども、何か、若い時の思想的なことか何かひっかかりましたのか、鈴木吉満理事が、もうちょっとで決まりそうだったのに惜しかったなあ—ということで、備ってもらえなかったんですけれども、一人でデフォレスト先生のところに行きまして、何か知りませんけれどもデフォレスト先生が「決めた」と言って採って下さったらしいんです。それが昭和八年です。それで多分そのパーティは、まあ、昭和八、九年から十年、十一年頃、今の湯浅名誉理事^⑪、もう九〇歳に近い湯浅さんとか、やな夫人^⑫とかがお若かった頃のことだとわたくしは思いますので、そうしますと、この一九七二年の時から三十数年位前がそのパーティになるんです。その三十数年前のチャプリンを思い出して、昨晩^{ゆうべ}見たから—と書いて下さってるんですね。一九七二年四月十二日と

いうこのお手紙の日附を考えますと、その三月末、つまり十二日前に溝口はもう定年退職しております。情報の早い先生ですから、半月前にもう定年退職で、学長職を終了していることも御存知だったのかとも思いますけれども、もしそうとすれば、このお手紙はうちの方に下さると思うんですが、そして、定年のことを御存知だったとすれば、教壇を降りた者に、「リラックスするのはいいことですよ」という意味で下さったのかとも思うんですが、学校に下さってしますので、まだ在職だと思ってるのかなあ、とも思うんです。当時この手紙については溝口本人と話した覚えがあるんですが、そのどっちだったかは、何しろ本人ももう死んでおりますので、今からきくすべもありません。けれども手紙の終わりの方に、「四月からの学院の新学期がスムーズに始まっているように祈っています」と書いてありますので、まだ在職だと思ってるのではないのでしょうか。それで学校宛てで来たのではないかと思います。そうとすれば、あの大学紛争たけなわの苦勞の多い時の責任者の立場を労って下さって、そしてまた、昔デフォレスト先生が心勞でお倒れになった一兩年あとの昭和十六年にまだ若かった溝口も、過勞やその他種々の心勞で遂に神経が疲れてしましまして、長期欠勤の時代があったことを御存知でいらしたデフォレスト先生の、ユーモアをまじえた暖かい忠告のお手紙だったのだと思います。

このお手紙やその他いろいろなものを通して、デフォレスト先生の愛のかぐわしい香りを、今もなお心の奥深く感ずるものがございます。

編者・註

- ① シャーロット・B・デフォレスト「シ・ビ・デフォレスト」―神戸新聞学芸部編『わが心の自叙伝』(2)、昭和四十三年、一九一頁。

② 故溝口靖夫神戸女学院大学教授(在任一九三三—一九七二)。宗教学、社会学担当。宗教社会学の研究者。図書館長二年。またしばしばチャブレンも兼任。第五代学長(在任一九六九—一九七二)。この「追懷」に多く引用された『神戸女学院百年史 各論』(神戸女学院、一九八一年。以下「各論」と略す。)冒頭の論文「近代日本におけるキリスト教の受容と神戸女学院」は、その絶筆である。―略歴は、前掲の「各論」三三七—三三八頁を参照。

③ 前掲書、三二二頁参照。

④ 溝口同窓会長の在学時代に先立つ時期にデフォレスト先生の側近くにあった篠原 愛姉(高等女学部第四七回、高等部甲類第四九回、大学部第五二回の卒業生。―前掲書、三二八頁参照。また一九三九年まで神戸女学院在職。)が、この記念祭の会食の折りに明かしたところでは、ただ一度だけ、「遵守」を「そんしゅ」と読みちがえられたことがあった由。

⑤ 山口光朝『近代日本のキリスト教の光と影』教文館、一九八八年。

⑥ 『神戸女学院百年史 総説』(神戸女学院、一九七六年。以下「総説」と略す。)二二二—二二三頁。

⑦ デフォレスト『わが心の自叙伝』一九九頁。

⑧ 「各論」三三七頁参照。大阪YMCA主事、京都教会牧師を経て、一九二三—一九二五年神戸女学院大学部長。一九二五—一九三九年大阪教会牧師。一九三五年より神戸女学院副院長兼任。一九四〇—一九五四年第六代院長。この間、神戸女学院大学初代学長(在任一九四八—一九五三)、甲東教会牧師(在任一九四〇—一九五四)兼任。退任後神戸女学院名誉院長。ハワイのマキキ教会牧師、神戸女学院理事長を歴任。

⑨ 「総説」二二七—二二三頁参照。

⑩ 「各論」七頁。また九三頁も参照。

⑪ この前後のことは「総説」二三五—二三九頁に記述されている。デフォレスト先生の写真が載っているのは二三八頁である。
⑫ 前掲書、二二九頁。

⑬ このコーラス教室は、一九六五年に新音楽館が増築されるに伴って改築され、原形をとどめないが、次ページの写真に見る如く床が階段状に作られており、この下の空間を物置場として利用していた。位置は、一九八八年現在打楽器レッスン室となっている所である。なお、現在はこの上部に、楽器庫及び教員室が設けられている。(写真は、ゲルハルト・ヒュッシュ公開レッスン—一九六三年二月十三日—の「コマ。神戸女学院音楽学部蔵。)

⑭ この稿の原稿化にあたり、溝口会長から御指摘いただいたことであるが、「総説」四七九頁、神戸女学院略年表一九四七年の

項には「6・2デフォレスト名誉院長帰院」とあった。但し本文二七八頁には、「デフォレスト女史の帰院は天皇来院の一日前のことで……」と記されており、これより先、デフォレスト女史自身も「戦後二年目の六月に岡田山の神戸女学院へ帰って来ました。その翌日のこと、天皇陛下が女学院にいらっしゃいました。」と書いている（『わが心の自叙伝』二〇三頁）。

一方、「六月二日」なる文字は、昭和二十二年五月二十二日附「神戸女学院週報・新三号」に、この日にケリー師夫妻とデフォレスト名誉院長の歓迎礼拝を執り行なうということで、予定表の中に記されているものであるが、この同じ表の欄外には、「デフォレスト名誉院長には五月三十一日に御帰院の由」という記述も見える。但しこの「週報」はその後、女史帰院の日附を明確に発表せずに終わっている。

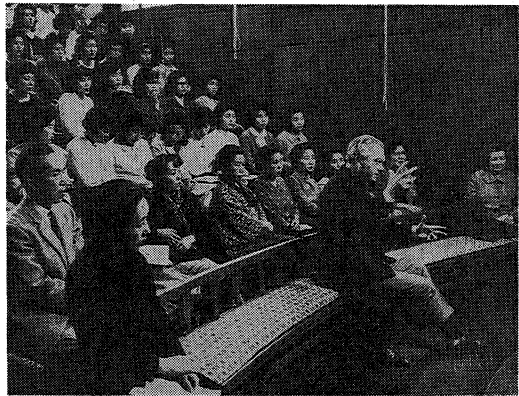
⑮ ピリピン人への手紙三章二〇節の「わたしたちの国籍は天にある。」という章句を含む箇所。このたびの記念祭では、七月二日の墓前礼拝の際にこの段落（二七一―二三節）が拝読された。

⑯ デフォレスト先生の帰米は一九五〇年のことであった。翌年三月発行の神戸女学院同窓会誌『めぐみ』には、「先生は去る十一月八日、過去四十五年の永い間丹誠をこめて育て、その爲に献身してこられた神戸女学院を後に大阪驛發の列車で上京、二十二日横濱解纜のマース号で歸國せられました」とある（第三四号一六頁）。爾来、来日はただ一度、一九六〇年の神戸女学院創立八十五周年記念祭の折りのことであった。

⑰ 鈴木吉満氏は財団法人神戸女学院理事会発足当初（一九二六年）の理事の一人。一九三九年までその任を負った。

⑱ 湯浅恭三氏。神戸女学院理事として一九三四年四月から一九五一年三月までと一九六五年四月から一九七三年三月までお務めであったが、その間、一九四一年二月から一九四九年六月までと一九六五年五月以降は理事長位にあった。一九七七年二月より名誉理事。

⑲ 湯浅恭三氏夫人。「各論」三三八頁参照。



音楽館の今はなきコーラス教室